

---

# 邪神な彼女と探偵活動

佐鷺 遙氷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

邪神な彼女と探偵活動

### 【NNコード】

NO806V

### 【作者名】

佐鶯 遙氷

### 【あらすじ】

僕は普通の人間だ。たとえ、世界的な英雄を親戚に持つてたり、その親戚の遺言でつぶれかけの探偵部に所属していたりしても間違つても毎週毎週事件を解決してくれるような探偵じゃない。

だから、困るんだ。本当に困るんだよ。

密室殺人事件の解決なんて頼まれても。

学校でおきた密室殺人事件。犯人は不明、凶器も不明。そんな警察も匙を投げるような事件を解決してくれだつて！？

そんなこんなで途方に暮れていた僕だったが、叔父が持つていた

鍵を使ってみた夢の中で一人の少女に出会った。

「私は千なる異形の神。這いよる混沌、ナイアルラトテップ。

私の趣味は人に協力してやり、その喜びをともに感じることだ。

悩みは何だ？私が直々に手を貸してくれようぞ」

邪神の名を名乗る、名状しがたき美しさを持つ少女に巡り合つ

た僕は邪神な彼女と探偵活動を開始するが……？

## 主要人物紹介（前書き）

前に書いた短編をプロローグとした人物紹介です。

## 主要人物紹介

### 主要人物紹介

#### 青雷 進斗

16歳 男 探偵部所属 一人称 僕 特技 家事、女性の機嫌取り 好きなこと 読書 自己探索

世界的な英雄であつた叔父の遺言で県立蔵縄学園の探偵部を存続させ続けるために入部。だが、もちろん事件など起きず、入部から1年たつた今でも何もない。はずだつたのだが…。

ちょっとマイナス思考だが優しく、歩道橋でオレンジをこぼしたおばあさんを素で手伝えるような性格。

また、「完全であるものは不完全でなくてはならない」という謎の信念を持っており、この点についてだけは非常にこだわる。

本人いわく、その英雄だった叔父の家系は「早死にする」とのことであり、実際に叔父の妹であつた母も34歳で死んでいるため、今は従兄の支援を受けて一人暮らしをしている（叔父の功績で血縁全体に国から補助金が支給されていることもあり、大してあてにしているないが）。

#### ナイアラルトテップ

#### 歪神 ナイア（現実世界で名乗る名前）

17歳（人間換算） 女（人格のみ） 一人称 私 我（自分の

名と肩書き、異名をいうときだけ）

特技 千の姿に変わること（実際には9945種類しかないらしいが） 好きなこと 人の手助け

進斗が『夢の国』に迷い込んだ際に出会った名状しがたき美しさ

ドリームラン

を持った邪神の名を持つ少女。墨のような漆黒に見えながらも雪のような白銀にも見える髪を持ち、透き通るような白さを持ちながらも大地のような褐色をしている肌を持ち、女神のような神々しさを纏いながらにして悪魔のような邪悪さを漂わせる容姿をしている。もつとも、そんな人外の化身のような美貌を持つていて人の手助けを無償でしてくれるような優しい人（？）なので、怒らせなければ何の問題もない。

ちなみに、なぜか現実世界の服（女子の制服）がお気に入りで、進斗と初めて出会った時、蔵縄学園の制服を着ていた。

中途半端に現実世界の情勢に詳しく、オタク文化について詳細に語れるような偏り方。

## 邪神な彼女と余市の前の（前書き）

ナイちゃん出る予定だったんですが、もう一話か2話かかりそうです。

## 邪神な彼女と会う前の

完全なものは不完全でなくてはならない。

いきなり何を言い出すのかと思うかもしれないが、これが僕、青雷進斗の信条だ。

何て言つてみても日常生活じゃこんな信念を持つても全く関係ないし、披露する機会もない。いくら叔父が世界的な英雄であつたとはいえ、僕は単なる一高校生だし、その叔父の遺言でつぶれかけの探偵部に所属していても毎週毎週事件を解決するような人間じゃない。人に言えない特技や秘密だつていくつか持つているけど、それを加味しても僕は人間だ。

だから、困るんだよ。本当に困るんだ。

密室殺人事件の捜査なんて頼まれても。

「2035年5月4日、午前7時、バスケットボール部の女子が部室の鍵を開けると、2年6組の次原鈴音さんが首を裂かれて死亡しているのを発見。ただちに警察が捜査を開始したところ、ドア、窓、その全てに鍵がかかっていたことが判明。スペアキーを持する2人にアリバイは有り。マスターキーを持っていた教師も犯行に及ぶにはほぼ不可能との事。つまるところ、密室殺人事件だつたつてわけだね。この事から現場は頭を悩ませている」ということだつて、青雷君

うん。何が「ということだつて」なのかさっぱりだけどね。

この三日間僕たちの高校を震撼させている事件の概要なんか話されてもだから何なんだつて感じだよ。

朝から僕の机の前に立つてやけに度が過ぎる説明口調で話していたのは同じクラスの仲波真帆さんだ。これといった目立つ特徴はないし、僕がひそかに恋焦がれているなんてことも無い。つまり、

モブキヤラだ。

「青雷君？」

「あ、ごめん。ボーッとしてた。

で、あの事件がどうしたの？」

「はいそうです。さつきも言ったけど、現場が頭を悩ませているんですよー」

「はあ

「と、言うわけでおにいちゃんの安眠のために事件の解決に貢献してください」

…………何言ってんだこの人は？探偵部とはいえ高校生探偵でもなんでも無い僕に事件の解決に手を貸してくれだつて？そんなことができるわけないだ「うん、わかつた。警察の人にもわからない事件なんて解決できるかわからんけど出来る限り協力させてもらうことにするよ」何言ってんの僕はああああああつつ！…………？？？

「ほんと！？？」いえ、無理です。

「ああ。任せて。役に立ちそうな人を知ってるんだ」いねーよそんな奴。

あまりに自身満々な僕の態度に安心したのか「ありがとう」といつて去つていく仲波さん。だが僕は間違なく役に立てない。

こんな時ほど母の家系を呪つたことは無い。母の家は平安時代に朝廷から直々に名前をもらつた隠れ名家らしいのだが、幾つか呪うべき遺伝的要素がある。その一つがさつきのあれだ。

僕が『括弧付けの嘘』と（まさしくカツコつけだが）呼ぶこの癖

がその一つだ。母の家系は男女問わず異性の頼みに対してもほとんどの場合カツコつけて答えてしまつという、僕のような平凡を地で行くような人間には地獄のような性質を遺伝させている。生まれてこのかた何度もこの癖のせいで何度も危ない目に遭つてている。もう、かなり昔の本のキャラのセリフを叫んでしまいたいぐらいだ。せーの、「不幸だ——————」（心中で）

邪神な彼女と出会った夜（前書き）

ナイさん登場です。

## 邪神な彼女と出会った夜

「…………と言つ訳なんですが、どうしましょ、真治さん」

「しーらね」

「ひどつー?」

今しがた非道な返事を返してくれた人は件の叔父の息子さんで、名を蒼焰そうえん 真治しんじ と云つ。

僕の家は父も（僕が生まれてすぐに事故で死んだらしい）母も（僕が10歳の時に倒れてそれっきりだ）死んでいるのでこの従兄である真治さんの援助を受けて生活している（まあ、叔父の功績のおかげで国から援助金が出ているが）。真治さんは本当は優しくて家族思いのいい人なのだが、こういった系統の血筋関係の話になると少々厳しくなる。自分の血筋の問題は自分で解決しようと云う事なのだろうか。真治さんは『括弧付けの嘘アレンジタスイーズ・レイ』に悩まされている様子は無いのだし、自分で克服したのだと思う。

「…………まあ、さすがに、知りませんじゃひでえわな。進斗、ほれ」と云つ。

「のわつー?つて、鍵……ですか?」

真治さんが放り投げてきたのは銀製おもてしきと思しき、20センチほどの長さの鍵だった。何やら不思議な文字が書かれていて、手にした途端に神秘的な雰囲気と重みが伝わってくる。

「『銀の鍵』だ。使え」

「いえ、分かりますし、どう使えと?」

「知らないか?ハーワード・フイリップス・ラヴクラフト著『銀の鍵』、『銀の鍵の門を超えて』」

「読んだことは…………え?」

「マジで?」

「『夢の国ドリームランド』とか云つ不思議ランドに行けるあれですかー?」

「父さんが作ったやつだけどな」

叔父さん…………？ 一体、どんな秘密を握っていたんですか……

……！ ？ ？

「死ぬ5年前からそんな謎アイテム作りまくつてたらしいからな

ー

ますますどんな人か分かなくなってきた……。母さんの話じゃ  
すぐ優しくせに計算高くて、奥さん大好きで、滅茶苦茶強くて、  
公務員のくせにヤのつく職業真っ青の人だつたて言つけど……ますま  
すどんな人か分かなくななる。確かなのは、叔父さんは得体の知れ  
ない『力』を持つてたと言う事、それと、1999年と2012年  
に何かをしたと言う事。この2つだ。

「真治さん、叔父さんつてどんな人だつたんですか？」

「ん？ そうは言つても俺が7つの時に死んでるしな。あーーー

……人、だつたとしか言いよがねえな。父さんはどんなに化け  
物じみていても、人であり続けようとした人だ。それは変わんねえ  
よ」

「そう、ですか……」

僕もそうなる日が来るのかもしれないな。

心の中で心配事を一つ吐き出して、真治さんに向きなおる。

「ありがとうございました。使ってみます」

「夕飯は？ 姫華ひめかが作つてんだが」

台所では真治さんの奥さんの姫華さんが料理を作つてゐる。でも、  
今日は朝の残りが残つてゐるのだ。もつたいないので家で食べるこ  
とにする、という皿の言葉を伝えると、「ん、分かつた」と送り出  
してくれた。「真璃まりちゃんまたね～」と手を振るとブンブンと振り  
かえしてくれたので満足。従兄姪は可愛過ぎて困る。

「じゃあ、また明日来ます」

「ん。ちゃんとメシ食えよ」

さよならー、と言わんばかりに手を振つて真治さんの家を立ち去  
つた。

僕は1人で一軒家に暮らしているのだが、明らかにメリットよりもデメリットの方が大きい気がする。1人であろうと無からうと結局電気代はかかるのだ。そんなのだったらもう1人か2人居たほうがいいに決まっている。だが、この高校生の身分で誰かもう1人住むというと

「……同棲……ぐらいしか無いよな……」 ありえない。誰とすんだよ。まず彼女が存在しない*いない*のでムリデスネ、ハイ。

いや、また。こんな謎アイテムで不思議ランドに行こうとしてる時にこんな事を思いつくって言うのは何かのフラグなのか?もしかして人外の彼女が今から出来てしまつたりするのだろうか。さすがに人外の存在はお断りしたい。僕は一応人間だから。……まだ。

「…………ダメだなあ…………」

どうも思考がマイナスに入つてしまつて困る。おとなしくこの謎アイテムに身をゆだねることにしますかね。

じゃ、おやすみなさいとお。

そんなことを心の中で呟いて、目を閉じた。寝付きがいいことについては自慢できるので、すぐに意識が希薄になつてゆく。自分が永遠の闇に落ちていくような感覚と一緒に、いつしょに、いしょに

おちていく。

人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い人じや無い。

お前は人間じゃあ、無い。

「ああああああああつああああああああああああつ  
つつつつつ……！」  
絶叫と共に跳ね起きた。

「ツ！ハツ！ハツ！ゴフツ！ゴハツ！」

呼吸が整わずにむせ返る。

上体を起こしたままではしばらく深呼吸を繰り返していたが、あることに気が付いた。

いつものベッドじゃ無い。

そして。

「生きているか、人の子よ？まあ、この『夢の国』で死ぬというのはとてもなく愚かしいことなのだがな。ちなみに言つておくがそこまで恐怖に怯えてここに来たものはおらんぞ？更に言つておくが、その夢は私のせいではない。そなた自身の夢だ。そういう意味ではこの夢に来られて幸せと思っておくがよい。そうでなければ一晩中その悪夢に翻かされることとなつてはいたであらうよ」

声がした。

どんな声とは名状できない。清らかなのか、おぞましいのか、判断できなかつた。

首を回し、その声の持ち主の方を見た。

自分の目が信じられなかつた。

そこには玉座があり、そこには少女が退屈そうに、實に暇だと言わんばかりの態度で座つていた。そこまでは理解できる。

だが、その少女は、墨のような漆黒に見えながらも雪のような白銀にも見える髪を持つていた。

その少女は、透き通るような白をを持ちながらも大地のような褐色をしている肌を持つていた。

そして、その少女は、

女神のような神々しさを纏いながらも、悪魔のような禍々しさを漂わせていた。

そして、その名状しがたき少女はあの名状しがたき声で告げた。

「ようこそ、一人の狂喜に囚われた作家が創り出した世界、『夢の国』へ。

我こそは千なる異形の神。這いよる混沌ナイアラルトテッブ」  
名状しがたき美貌を持つた少女は邪神の名を語り、僕は、僕は。彼女に恋をした。

## 邪神な彼女の質問タイム（前書き）

なんだか…。進斗殺したくなつてた……（「いやまつ迺わい」）

。

## 邪神な彼女の質問タイム

夢の中で出会った人（？）に一目惚れしましたとか言つたら、頭のあれな人つて思われるんだろうけど、今の僕にとってそんな事はどうでもよかつた。生まれてこの方誰かを好きになったことは無かつたのだけれど、これが恋なんだと確信した。

そう、僕は恋をしたのだ。邪神な彼女に。

「ここに人の子が訪れるのは10年ぶりか。いや、15年ぶりだつたやも知れぬ。まあ、些細なことであるな。  
よくぞ来た。1人の狂喜に囚われた作家の創り出した世界、『夢の国』へ。

この世界に来たと言つ事はそなたも何らかの秘密と、何らかの悩みを抱いているのだつ。

私のもとにはその悩みの解決に力を尽くしてくれよう。我こそは這いよる混沌、ナイアラルトテッPなれば。

さあ、望みを言つがよい

「付き合つてくださいつ……」

「ブフウツ……な、何を言つてあすのだつ……？」

「あ、噛みましたね」

「うるさいつ！そんなことはどうでもいいのだつ……？」

あれ？何か口を押さえてフルフルしてゐるんですが……もしかして、物理的に噛んだのか？

一目惚れした人なので心配になつた。

「あのー…大丈夫…ですか？」

「はれの…ふえいらと…おふあつてふいるのふあ…ひょなひやは

……！」

たぶん、「誰のせいだと思つてゐるのだそなたは……」つて言つてんだと思うけど……涙目でフルフルしてんのがやばいです。

可愛過ぎます。理性が飛びそうです。思考回路はショート寸前です。

「まつたく……どうして私の所に来るものは変人ばかりなのだ…

…？」

引き」もりや邪悪皇太子はもちろん、ファイヤーバカの所にさえまともな人間は来るというのにどうしてこんな出会った直後に告白していくような意味の分からんやつが私の所に来るのだ……？答えてくれ我が王よ」

いや、邪神の名前を持った人が言うセリフじゃないと思いません。ついでに我が王ってのはあれか。『白痴の魔王』こと『アザトース』なのだろうか。どうでもいいが。

あれ？ そういえば、

「本当に這いよる混沌、ナイアラルトテップさんなんですか？」

「…フン。今更丁寧になりおつて……まあ、よからう。面倒くさいがこの世界の成り立ちから説明してくれようぜ。ついてくるがよい」

そう言つて彼女は玉座から立ち上がり、奥へと歩き出した。

……なぜか僕の学校 蔵縄学園の制服を着用していたが。

「なんで、僕の学校の制服着てるんです？」

「何つ！…？…？…これはそなたの学校の制服なのかッ！…？…？」

何だ、その食いつきの良さは。

「は、はい」

以上に良い反応に驚きながらもビックリ返事を返す。

「そうかそうか！…なら聞かせてもらおう…本当にこんな恰好をして「ウシヤとかいうものの中にはひしめき合っているのかッ！…？」

「え、ええ。少なくとも僕の学校では制服着用が義務付けられてるので……」

「少なくとも？その他にも何かあるのか！？」

僕の返答の中から少なくともといつ一言を聞き取つて興味深そうに聞き返してくる。その顔もやっぱり可愛いと思えるのでベタ惚れなんだらうな、僕。

「えーっとですね…他の学校には私服登校つてのがあります…」「しふく?わたししふくと書いて私服なのか っと、すまないが

「……で話は終了だ。着いた」

「あ、はい……つて何だこいつー?」

僕がナイアラルトテップ่าน (呼びづら過ぎるので以下ナイさん) に連れてこられたのは、

本で全てが埋め尽くされた空間。 本で全てが埋め尽くされた空間。 本が全てを埋め尽くした空間。

壁、通路、床、棚、机、あらうことが天井までもが本で構成されている、異常に狂氣の世界。

単なる本でもその数が人の限度を超えてしまつといひまでの圧迫感を与えてくるのだと僕は悟つた。

って、あれ? もしかして読んだら発狂するような魔道書とかも混じってるんじゃ……なんて思いながらも足元の本に目を落としてしまう。そこについたのさ、

# 『萌え萌えクトゥル一神話辞典』。

別の意味でSAN値が下がつた。

## 邪神な彼女の解説タイム（前書き）

この世の、神と呼ばれる存在についての筆者の考え方（妄想）を本作の設定としています。ご了承ください。

## 邪神な彼女の解説タイム

「さて、光栄に思え。解説タイムだ」

「何でファ○ガイアの王っぽいんですか？」

「気にしてはいけない。気にしては……ん？」

そこまで言つてナイさんは本の空間の隅の方を見た。僕もつられて見てみると、その隅の方では、青黒い煙のような物がもうもうと立ちこめていた。

「あれ？ どうかで聞いた」 って言つたりあれば

よな。90度以下の鋭角からどんな所にも侵入してくる某獵犬だよな。

「ティンダロスの獵犬 ッツ！……！」

ティンダロスの獵犬。フランク・ベルナロップ・ロングが発表した『ティンダロスの獵犬』。その作中に登場するクリーチャー。僕たちの住むこの世界とは違う空間から90度以下の鋭角を伝つてこの世界に出現する不淨な存在は、僕たちを細切れにするには十分の力を持つている。

「ナイさ」

ナイさんをせめて底おうと動き出したその瞬間。

「去ね、愚犬共が」

絶対零度の声と共に放出した黒色のオーラのようなものが煙を四散、いや消滅させていた。

「…………ワオ」

おそらく、すさまじくマヌケな顔をしていたと思つ。僕は、その姿に見惚れていた。

「まったく。ここ2、3年間の歪みは異常なものだな。邪悪皇子に深海引きこもり、それにファイヤーバルの所もノイズが走るらしいが……『アストル・ディエスト・ラフィー・オン星消しの光条』の影響が出始めたのか……？」

「何か、伏線っぽい発言が出て来たけど……ま、いいよね？」

「おつと、済まない。考え方夢中に……なにをジッと見つめているのだ？」

「いえ、かつこいいなーと。さらに好きになりました」

「ツ……。もうよいつー好きに懸想してあるがいいわつ」

そいつは光栄なことで。じゃあもつと言いますよ？

僕が心の中でじみーにほくそえんでいると「さあー」と、ナイさんが急に大きな声を出した。

「愚犬どもの入つてきた穴は封鎖済みだ。私はこの『夢の国』<sup>ドリームラン</sup>内に於いてのみまさしく邪神のごとき全能さを誇ることが出来るのが数少ない自慢の一つなのでな」

「あ、そういうえばさつきから聞いたかつたんですけど、本当に邪神なんですか？」

「……結論から言つのなら、イエスだ。詳しい説明をするのならばしばらく時間が必要となるが構わぬか？」

「ええ。もちろん」

好きな人の事は詳しく述べたいものだしね。何て事を心の中で呴きつつ即答した。

「……では、何から話したものか…。そうだな…神と呼ばれる存在は実在する。

正確に言つならば、精神的な生命体だ。彼の者達は肉体を必要としない生き物なのだ。

彼の者達は知的な生命が誕生すると確定した惑星の手によつて生み出される。通常は順当に進化したその知的な生命達が、元より存在した神達の姿を無意識的に感じ取り宗教を創り上げて行く訳なのだが…どうした？質問でもあるのか人の子よ

「え～っと…いろいろ聞きたいことは有るんですが…何より聞きたいのは、あなたは何のかつて事です。

クトゥルフ神話は20世紀になつてから創作された物のはず…なぜ、邪神、あなたはいるんですか？」

「……ハーワード・フィリップス・ラブクラフト。知つてゐるな

？」

しばしの沈黙の後、ナイさんは僕に確認するかのように問い合わせた。

「ええ。クトゥルフ神話体系の生みの親でしょう？」

「そうだ。だが、彼の者にはある『力』があった」

「力？」

思わず聞き返し、ナイさんと眼が合つ。彼女の瞳<sup>め</sup>にはなんとも言えない光が宿つていた。

「そうだ。『一定数以上の人の思念が集まった物語を具現化する』

という『力』がな」

「…へ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0806v/>

---

邪神な彼女と探偵活動

2011年10月15日12時46分発行